

B-ぐる NEWS

洗車ツアーやぶんぱくで、大勢のファンと交流

毎年恒例のB-ぐる洗車ツアーを2025年10月11日に開催、あいにくの小雨も負けず、競争率8倍!の抽選を突破した総勢19組53名の親子が足立区綾瀬のB-ぐる車庫に集結し、日頃の感謝を込めてバスをきれいにしました。

11月のぶんぱくでは、前年のB-ぐるグッズ人気投票で圧倒的な支持を集めたB-ぐるミニカーが「着せ替えシール」という形で実現し、展示販売したところ、予想を上回る反響に手応えを感じることが出来ました。



B-ぐる着せ替えシール

市販のミニカーがB-ぐるバスに大変身!
3路線を有償頒布しています。
お問合せは下記のメールアドレスまで。
tomonokai@b-guru.tokyo



今季の一枚

輝く新成人に
幸あれ!



【編集後記】

世の中にレジェンドがあふれる今こそ、その道を知る達人に静かに敬意を。(N)
開発発展著しい文京ですが、取材して伝統多いのに感動しました。(I)
終わらない伝説たち (Neo Legend) のさらなる未来へ期待が高まります。(O)

people (びいぐる) vol.25



発行日 ● 2026年4月
企画・発行 ● B-ぐる友の会 <https://www.b-guru.tokyo/>
文京区向丘 1-13-1 さんぽみち総合研究所(株)内
協力 ● 日立自動車交通(株) ● (株) アイフィス

発見! B-ぐる沿線のディープな情報

4
2026
vol.25

BUNKYO NEOLEGENDIC

ネオ鉄人伝説

people

司馬遼太郎も驚嘆した本郷の大クス。
600年の時を刻み、文の京を見守る生き証人。



言問通りにズラリと並び、
(昭和42年、先代森川別

下宿時代の中庭を旅館ロビー
に改築するために架けた屋根

Neo Legend

鳳明館

最後の生き残り、鳳明館のリスタート

戦後から昭和40年代頃まで本郷一帯は旅館街としてにぎわった。明治時代の下宿を前身とする鳳明館もその一つだが、令和8年4月、128年を未来につなぐための転換点を迎える。震災と戦災を乗り越え、戦後は旅館専門として団体旅行、修学旅行ブームを支えてきたが、コロナ禍によって廃業を決定。大手デベロッパーに売却という寸前に、松下産業(本社本郷1)が事業承継に名乗りを挙げ、事態は急展開することに。登録有形文化財の本館をはじめ、建築としての学術的価値はもちろん、地元愛に満ちた新生・鳳明館のリスタートに期待が集まっている。令和8年4月末までは日帰りプランのみ営業中。昭和レトロの寛ぎはもちろん、客間の縁起物など館内見学のお楽しみ付き。申込は鳳明館公式ホームページから。

継承は力なり

時代を超えてしなやかに。

静かに歴史をかさねてきた企業を紹介します。

人も店も変遷があっても南天堂 書房は続く！



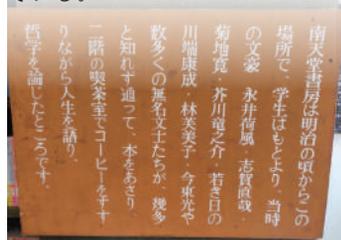
Neo Legend

南天堂

現在の店舗

Bーぐるバス停白山上の前に南天堂書房はある。緑を基調とした明るい店内、中央にレジカウンター、奥の事務所脇の小棚に昔の店の写真と歩みのパネルが掛かっている。市井の本屋でなかった伝説はここに集った有名な作家やアナキストたちにある。大正6年の開業、そこから代替わりして、昭和15年に現代表取締役の祖父に引き継がれた。古い建物も2階にあったカフェレストランも語る人々もなくなり経緯を辿るのも難しいが、所在、店名を伝承し続けている。店奥で学習教室が開催され、安全性

を考慮して店内を子供達が通う。帰りを親たちが本を読んで待つ。児童書も子供目線の高さに平積みされ活字離れ著しい昨今に本好きが増えていく工夫がなされている。



かつての南天堂の様子
が紹介されている

煉瓦をあしらった外壁も
モダンな戦前の店舗

江戸時代から「米」の伊勢五

伊勢五米店は、1700年代江戸時代に創業、蔵に残された資料は文京ふるさと歴史館に寄贈され、建物は登録有形文化財、厳選したオリジナルのブレンド米を先代から販売している。米は干ばつや冷害など飢饉に悩まされ、戦後も米穀通帳、小売の自由化、パンやパスタの普及、米飯店の高齢化等安泰とは言い難く、近年の価格の値上がりも悩ましいが、米飯への希望は何ですか？と五つ星お米マイスターでもある若き8代目社長に伺うと、1日1回特に朝にご飯を食べて頂きたいというシンプルな回答。高い天井、年季かかった飴色の格子戸、規則正しい精米機の音がする空気感は継続し不変である。



Neo Legend

伊勢五



米屋のトレードマーク
稲穂のディスプレイ

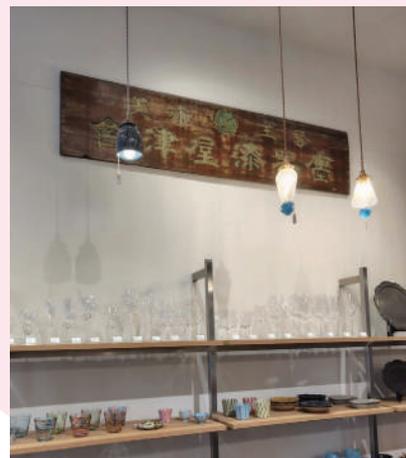
4代5代目が豆を煎り続ける

Bーぐるバス停菊坂通り真向いに1887年創業の石井いり豆店はある。店内中央で豆を煎る。生憎訪問した時は作業が終了していたが、豆は煎りたてが美味しいと思っていたら、冷めてからが良いそう。千葉県八街の落花



Neo Legend

会津屋



手中で作家の意思が伝わる

白山通りBーぐるバス停三田線春日駅に会津屋はある。1717年創業、元は漆器を扱った。戦火で物品は焼失、平成の再開発で仮店舗運営を余儀なくされるなど時代の変遷を受けつつ同じ場所に戻った。11代目店主の審美眼で日本全国から集めた食器やガラス器がディスプレイされている。大量生産のテーブルウェアに慣れているが、作家が工房で作った器は色合や形で使う際のイメージが浮かぶ。高評価間違いのないギフトにも、自分ご褒美にマイグラス等、家の事情が許せば天井に星の如きガラスのランプシェードが新鮮。定期的に作家展も開催される。

生、北海道の袖振大豆、そら豆…ズラリ、味も塩やバター、カレー等目移りする。ブリキが貼られた木箱に並べられ、木枠のガラスケースに煎餅。戦火は逃れ昔のままの店を2010年に原型をそのまま手入れし全面リフォーム。外装に至っては、こげ茶で古い木造風に見せる防火基準になった素材である。客が絶え間なく来店する。市販品とは比較にならない味にリピーター、お試しあれ！



Neo Legend

石井いり豆店

Neo Legend

B-ぐる



初代B-ぐる

信頼を乗せて、坂道を走る

初代B-ぐるの記憶

B-ぐるの歴史を語る上で欠かせない存在が、初代車両として活躍した三菱ふそうエアロミディだ。コミュニティバス黎明期に登場したこの車両は、当時としては珍しい小型ノンステップ構造を備え、地域交通の新しい姿を示したパイオニアでもあった。平成19年4月の運行開始(現千駄木・駒込ルート)から2代目日野ポンチョにバトンを渡すまでの8年半の間、多くの坂を登りながら私たちの生活を支え続けた功績はまさに功労車。

技術の先にある、一番の安全

区内の道を熟知し、今日もまちの「足」として走り続けるB-ぐる運転士・吹上太智さん。

吹上さんが選ぶ、プロドライバーとしての腕の見せ所ベスト3は

- 第1位：服部坂 急に道が細くなり、クランクが2回続く難所
- 第2位：大日坂 道幅が狭く、せり出した電柱に細心の注意が必要
- 第3位：菊坂 商店街で人通りが多く、路上駐車も多い

だが、吹上さんが大切にするのは、運転技術以上に「挨拶」。乗車時に「おはようございます」、降車時に「ありがとうございました」の一言が、車内に安心感を生むと言う。そんな吹上さんを支えるのは、その日の運行ルート・ダイヤに合わせたランチのルーティーン。休憩が13時を過ぎる時は選択肢も広がり、乗務にも気合が入るのだとか。

「私にとってB-ぐるとは、文京区の皆様の生活を支える大切な足です」



国内外の道にはたくさんの乗り物(ビークル)が走っています。目的もデザインも様々、B-ぐるだけでない話題を紹介します。

聖橋、100年の誇り

震災復興が生んだ名橋

文京区内の土木施設でレジェンドと言えば聖橋が筆頭でしょう。御茶ノ水駅東側の神田川に架かるコンクリートのアーチ橋です。北の湯島聖堂と南のニコライ聖堂を結ぶ橋なので「聖橋」と名付けられたとあります。

関東大震災後の復興計画で建設された橋で、震災から4年後の1927年に完成しましたので来年で100年になります。この時期東京では震災復興のため多くの橋が建設されました。隅田川の清洲橋、蔵前橋、駒形橋、言問橋、相生橋など東京を代表する橋梁群は震災復興のために同時期に整備されました。

技術者たちの気概を今に伝える

見ていただくと分かりますが、いずれの橋も違う形式の橋です。現在なら復興を早める目的で同じデザインで設計コストを下げ、共通の部材を使って効率的に建設しようとするかもしれません。しかし当時敢えてバラバラの形式で橋を設計したのは、土木技術が発展途上であった日本で様々な形式の橋で経験を積み設計技術の向上が目的であったと考えられます。設計に携わった土木技術者の気概も感じられ、聖橋は同世代の橋と比べてもユニークな構造と景観です。太平洋戦争中幾たびも空襲で危機に遭いましたが、幸い戦火を逃れ戦後の復興にも役立ちました。2017年には土木学会選奨の土木遺産に認定されています。聖橋の文京区側にB-ぐるのバス停もありますので見に行かれたらいかがでしょうか。

